

佐藤広美・岡部芳広（編）
『日本の植民地教育を問う—植民地教科書には何が描かれていたのか—』

2020年 皓星社 A5判 374頁 定価（本体4000円＋税）

中村 美和子*

本書は、1997年3月に結成された日本植民地教育史研究会の共同研究の成果である。この研究は2006-2015年度中に計3回の文部科学省科学研究費助成事業の対象となり、本書の出版にあたっては同事業「研究成果公開促進費」を受けた。同研究会の設立目的は、会則によると「日本および欧米諸国がアジアなど世界各地で行った植民地教育支配に関する調査と研究を行うこと」で、「アジアとの交流を深め、アジアから信を得ることのできる学術的研究」が理念とされている。編著者の一人、佐藤広美が「序章 日本の植民地教科書には何が描かれていたのか」で、研究会結成の背景には日本の植民地支配下での教育と教育学の役割が戦後の教育学界で十分に検討されていないことへの問題意識があったとする。また、研究の協働のベースには、日本の植民地教育が母国語をうばって諸民族の内面生活をふみにじる暴力をかさね、国内教育では植民地支配民族としての自己形成を図ったという二側面の有機的統一的把握があるという。

本書の副題にふくまれるキーワード「植民地教科書」の分析は、会の発足当初から重視されてきた。1904年から1945年の太平洋戦争終結後しばらく、日本の内地では文部省編集の国定教科書が使われたが、台湾、朝鮮、満洲、南洋群島、東南アジアなどでは総督府、軍政部などにより地域ごとに教科別教科書が編集された。いま一人の編著者、岡部芳広が「おわりに」で、各地域の教科別教科書を以下の三つの視角から解明することが研究会の課題だったと説明する。

1回め（2006-2008年度）の研究では29人の研究者により、植民地教科書と内地の国定教科書の網羅的な比較がおこなわれた。2回め（2010-2012年度）では25人が、大正中期からの「新教育」の視点が植民地教育にどう取りこまれ展開されたかを考究し、3回め（2013-2015年度）では31人が、植民地の近代化・産業化の影響を教科書中に観察する課題にアプローチした。一連の研究展開に沿い、本書も第Ⅰ部：植民地と「日本人化」、第Ⅱ部：植民地と「新教育」、第Ⅲ部：植民地と「近代化」の3部構成となっている。

各課題にはすでに個別の科研費報告書があるが、本書所収の16報のうち5報は書きおろしで、元論文のある残り11報についても、学校教育関係者や一般読者に対する可読性への配慮、著者個々の研究の進展や問題意識の推移から、報告書の内容に手が加えられた。3回分の報告書が再構成され、「進化／深化」が図られている。以下に、序章と「おわりに」をのぞく全3部の論文題目を、著者名を付して列挙する。

第Ⅰ部の「日本人化」を課題とする論文は6報で、合津美穂：公学校用国語教科書による台湾人の「日本人化」——教材の「内地化」と「台湾化」に着目して、岡部芳広：台湾の子どもたちを、「日本人」にしようとした音楽の教科書——台湾総督府発行国民学校芸能科音楽教科書の分析から、北川知子：植民地朝鮮の国語教科書がめざした「日本人化」——芦田恵之助が編纂した『朝鮮読本』から、白恩正：「科学性」から「政治性」重視へ変貌する日本統治下朝鮮の地理教育、宮脇弘幸：南方占領地の「日本化」教育——ビルマ・インドネシア日本語教科書から、一盛真：補論 教科書の中の植民地主義と人種主義、である。第Ⅱ部の「新教育」を課題とする論文は4報で、白柳弘幸：植民地台湾における学校劇、滝澤佳奈枝：日本統治期台湾の公学校裁縫教育と新教育——木下竹次の裁縫学習法を手がかりとして、山本一生：満洲の子どもを「新教育」で育てる——教育雑誌『南満教育』の分析を通して、宇賀神一：「満洲新教育」の構造——『満洲補充読本』の改訂を手がかりに、である。第Ⅲ部の「近代化」を課題とする論文は5報で、陳紅彪：教科書にみる植民地台湾の疫病、衛生、医療と近代化、井上薫：植民地朝鮮ではどのように農業を教えようとしたか——稲にかかわる理科との連携を中心に、丸山剛史：「満洲国」国民高等学校実業教

* お茶の水女子大学基幹研究院研究員

科書編纂の思想的背景、小林茂子・清水知子：南洋群島の「近代化」と熱帯農業——第四次『南洋群島国語読本』の理科教材を通して、北島順子：台湾・朝鮮・南洋群島教科書に描かれた身体と近代化、である。

紙幅により、個々の論文の内容と成果の検討はひかえるが、ここまでのところで本書の企画経緯と概要を確認した。以下では本書の意義を述べたうえで、今後の課題として考察される点をあげる。

本書の意義については、(1)共同研究としてのアクチュアリティ、(2)多様な地域研究の俯瞰という2点から論じる。(1)は、本書の出版に向け、相応な検討が研究会として実践された点への評価である。「アクチュアリティ」とは、日常生活での認識を意味する「リアリティ」に対し、日常生活での実践的行為をさし、歴史家の営為も日常性の延長線上にあるととらえる、歴史学のありように対する一見解をしめすキーワードである(松沢 2013)。本書の協働では、書きおろし論文と元論文からの改稿に関する推敲作業が、2年間にわたる検討会議で研究者相互の批評によってかさねられた。「日本植民地教育史研究会」という団体名から同会の研究課題の独自性は明白だが、そうした検討の場をもち、植民地における教科書や教育理念の分析をとおして日本の国家主義、侵略主義の歴史を問い、国民教育として推進された近代化の再評価にチームとして取り組む実践は、学術の本来のありよう、可能性を再認識させるものである。なぜなら、研究者個々の資源を大きな研究課題にむすびつけ、建設的な議論をふまえた論述で研究フィールドの空隙をうめていく協働こそ、学術的な「界」がになう役割と受けとめられるからである。

第二の評価は、上記のチームとしての営為に関連し、台湾、朝鮮、満洲、南洋群島、東南アジアと広域にわたる地域研究が、さまざまな教科の事例で論じられている点である。岡部が今回は対象化されなかった修身教科書が今後の課題と指摘するが、特に第Ⅰ部において、多様な地域事例が分析された成果が明確に出ている印象を受けた。そこでは、現地人児童の教科書には国定教科書に近似していく面とともに国定教科書とは異なる教材が取り入れられ、巧妙な表現で現地の伝統、慣習を野蛮なものとして差別的にえがく傾向が地域ごとに提示された。地域性の否定のうえに、文明化・近代化の進んだ日本人の生活を見本とする方針が内包された点が解き明かされ、実態は必ずしもそのねらいどおりではない場合もあったこと、内地よりも進歩的な内容につくられた教科書でも「日本人化」の強調で進歩性が後退する結果をまねくことがあったことなど、興味深い分析が俯瞰される内容である。第Ⅱ部の新教育では満洲の事例に一定の成果があげられたが、岡部の省察どおり、植民地教育に利用された新教育の「欺瞞」にはさらなる考察が期待され、第Ⅲ部の近代化については同じく岡部の指摘どおり、近代化の進行にともなう受益者、伝統や民俗のとらえかたなどの考察と「近代」の内容そのものを問う研究の継続が求められる。「新教育」、「近代化」という課題設定に植民地教育研究の学際的な広がりも俯瞰される点が評価されるゆえの期待である。

次に、上記の研究の継続への期待に関連させ、一般読者を想定した本書であるからこそ、今後の成果物に検討を求めたい点として、(1)研究対象の説明をはじめとする論文フォーマット、用語の統一、(2)データの年表化、チャート化をあげる。(1)は、教科書という多様な編集物を対象とする共同研究であるため、北島論文のように、資料の概要をはじめに明記するフォーマットを共通に採用すれば読みやすさが増すと考えられた。また、同地域の同じ教科書を対象とするのであれば、名辞、呼称の統一が図られることが望ましい。(2)については、後付の資料としての整理を求めたい。日本の植民地となった歴史、教科書の改訂の回数などには、地域ごとの事情、差異がある。それらが一覧できる年表やチャートが整理されれば、各地域の特殊性と植民地全体の対照をふまえ、諸論稿をより深く理解するためのガイドとなるだろう。

以上、続編を待つ立場からの提言である。2020年からのコロナ禍で国際的な研究のいとなみは大きく制限を受けた状況だが、今につづく過去を見なおしながらの活発な議論の継承を今後も見守っていきたい。

〈参考文献〉

松沢裕作, 2013, 「歴史学のアクチュアリティに関する一つの暫定的立場」歴史学研究会編『歴史学のアクチュアリティ』東京大学出版会、pp.137-146.